

Klotz, Christian Adolph (1738—1771)

クロツ。ハルレ大學教授。彼はレッシングの友人ニコライを攻撃したのみならず、『ラオコオン』についても不当な批評を試みたので、レッシングの反駁を受け、そのために聲名を落した。當時は青年學者として評判高かつたが、實は左程の人でもなかつたらしい。(五五)

Knecht, Justin Heinrich (1752—1817)

クネヒト。獨國音樂家。(一七六)

」の部

La Fontaine, Jean de (1621—1695)

ラフ・ンテーム。(一七〇・九一・一六)

Lamartine, Alphonse Marie Louis (1790—1869)

ラマルティン。政治界にも活動した。Méditations poétiques (1820) はロマンティック詩に一時代を劃したものと言はれる作。Les nouvelles méditations (1823), Harmonies poétiques et religieuses (1829), Recueils poétiques (1839) 等は名高。散文には Le voyage en Orient (1835) の外に數篇の歴史がある。(一三〇・一五・一六)

Lambergier.

ラムベルシエール。(一五〇)

Lamia.

レミア。ギリシヤ神話のレミアは、ジュースに愛されたリビヤ女王。天の女帝ヘラが嫉妬からレミアの子を奪つたので、レミアは世間の子供を殺すやうになつた。爾來、鬼女レミアの名は子供を嚇す語となつた。ローマ鬼神談のレミアは女面蛇尾の吸血鬼女で、美婦に化けて青年を擒にして其血液を吸ふ。キーツの詩及びゲーテの Die Braut von Corinth はローマ傳説を用いたものである。我文學の雨月物語(上田秋成)の筋は餘程異つた點もあるが、其物語中の當麻の酒人或は法海和尚は、アポロニヤスと相似た位置に在る者だ。此蛇性の姪の話も、レミア

傳説も、恐らく一つ根源から出て變化したものであるまいか。(アポロニヤス参照)(五二)

Laokoon.

ラオコオン。ギリシャ傳説。ラオコオンはトロイのアポロー神殿の僧。神殿を汚した罪とギリシャ軍の木馬に關してトロイ人に警告を與へた事の爲に、神の怒に觸れ、海神ポサイドンの神壇に犠牲を供へる時、海中から現れた二大蛇に噛み殺さる。其子二人も共に殺されたといふのであるが、古い文献に、一人の子は逃れたといふのが有るさうだ。ゲーテは此古文献を知らなかつたにも拘らず、彫刻の三人の態度から想像して、父と一人の子は絶望であるが、一人の子は逃れる餘地がある、この餘地があるので、彫刻は全備であると言つてゐる。ラオコオン彫刻は紀元前四〇年から二〇年頃の間、ローヅのアジュサンダー(Agesander)がアセノドラス(Athenodorus)ポリドラス(Polydorus)等と共に作つたもので、ヴァジルの『イーニード』を本とした點については疑ない。此詩中に、ラオコオンの苦悶を形容して、犠牲の牡牛が頸に斧を打ちこまれて、聲高くうなるやうであるとある。ヴァンケルマンは、此形容と彫刻の態度を比較して見ると、彫刻には、そんな大聲の苦悶の叫喚が現れてゐない、これはギリシャ

人が苦痛を忍んで、號叫しない性質であるからだと解釋した。レッシングは、これに對して、ヴァジルは詩を作るのだから、ラオコオンをして叫ばしめ、彫刻家は彫刻を作るのだから、大聲の苦痛の様を避けたのだと解釋したのである。此彫刻は、一五〇六年ローマの某市民が葡萄酒から發見して、ローマ法王ジュリヤス二世に獻納したもので、ラオコオンと其一子(向つて左)の高く延びてゐる腕は、修繕上の誤であつて、原形は本書第四頁に掲げてある形姿であるといふ。イギリスでは、此語をレオコオン(Laokoon)と發音し、綴字は Laocoon が普通である。(四、四一—四八、五、五、五、六、三〇、三二、三三、三六)

La Rochefoucauld, François (1613—1680)

ラ・ロシュコー。佛國道德學者。今日 Maxims として知られてゐる書の著者。(二三)

Lasserre, Pierre (1867—)

ラヤール。La crise chrétienne (1891), Charles Maurras et la renaissance classique (1902),

La morale de Nietzsche (1902), Les idées de Nietzsche sur la musique (1907), Le romantisme fr. (1907). (註脚 141)

Levasseur, Thérèse.

ルヴァシール。(三三)

Leviathan.

リヴァイアサン。舊約ไบブルにあるレビヤタンはワニ或は「曲りうねる蛇」と説明してある(エフ記、イザヤ書)。とにかく正體のはつきりしない、奇怪な巨大な海中生物のことで、クチラなどもその例である。The Leviathan of Literature とはサミュエル・ジョンソンのことである。今は巨大なものに、この語を應用する。(五)

Lipps, Theodor (1851—1914)

リップス。Raumästhetik (1897), Aesthetische Einföhlung (1900), Aesthetik (1906)。(三六、四四)

Liszt Franz (1811—1886)

リスト。ハンガリーの人。Symphonic Poems, Rhapsodie hongroise 等。ユーゴー、ラマルテ、ン、シューチ・サント等と親しく往來した。ユーゴーの詩から作った曲は Ce qu'on entend sur la montagne (1848-1856)。シルレルの「イデアール」曲は一八五三—一八五七年。前者は

山上で聴くものという意味である。(一三、一四、一五、一六)

Livy (59 B. C.—17 A. D.)

リウ。ローマ史家。(一五)

Locke, John (1632—1704)

ロック。英國經驗派の哲學者。(一四)

Longinus, Dionysiu Cassius (213?—273)

ロンジニナス。ギリシヤの修辭學、哲學者。シリアのエメサに生れ、アレグザンドリアに學ぶ。新プレトオ派の學說に従はず、別にプレトオ哲學を説く。後シリアのバルミラ王國ゼノビア女王に聘せられて王子等の師となつたが、同國がローマの羈絆を脱しようとする謀り、力盡きて滅亡した時、彼は叛徒の一人と見られて死刑に處せられた。彼には數種の著述がある。有名な莊重論は、一の文體論であつて、英譯の On the Sublime とする標題は、適切でないさうだ。W. Rhys Roberts が一九〇七年出版したギリシヤ文と英譯對照には、此書に關する詳細な解説を掲げてある。(四、五、六、二六)

Loti, Pierre (1850—1923)

ロト。 Louis Marie Julien Viaud のペンネーム。 Les Derniers Jours de Pékin (1902)。

(三三〇—三三二)

Lotophagi.

ロトファジイ。蓮の實を食ふ人の意。ユリシイズ一行が此民族の住地に往つた時、蓮の實を喰べて歸國を忘れたといふ傳説がある。此民族はリビヤ種族で、其居住地は、地中海のアフリカ海岸に近いジェルバ島であると(シシリー島から南に當る)。(二四四)

Louis XIV. (1638—1715)

ルイ第十四世。在位一六四三—一七一五年(我國の寛永二十年—正徳五年)。王の世、佛國威大に揚る。一六八五年ナントの勅令を廢止した。(三二、三五、二四六)

Lowell, James Russell (1819—1891)

ローエル。米國文學者で、外交官。『月刊アトランティック』『北米評論』の主筆。ハーヴェード大學で文學を講じた。詩集の外に Conversations on some of the old Poets (1845)、Fire-side

Travels (1864), Among my books (1870—76) 等の論文集がある。(三二〇—三二二)
Lucian (120—180?)

ルーシアン。ギリシヤのモーモリスト。英譯名 Dialogues of the Gods 及び Dialogues of the Dead は輕妙な文體。The True History と題するものは、スウィフト、ベルジラック、ラベレーなどに暗示を與へた假作物である。(八七)

Luther, Martin (1483—1546)

ルーテル。(四六、五〇、一〇三、一四一)

M の部

Machiavelli, Niccolo (1469—1527)

マキヤヴェリ。(一四一)

註釋及び索引

Maeterlink, Maurice (1862—)

メータリントク。デントに生る。Les Disciples à Sais et les Fragments de Novalis (1895) の序文。最近の作は、英譯名 The Burgomaster of Stilemonde (1920), The Miracle of St. Anthony (1919), Mountain Paths (1919), The Cloud that lifted (1923), The Power of the Dead (1923). (107)

Malebranche, Nicolas (1638—1715)

マルブランシ。デカルト派の哲學者。(四、八五)

Malherbe, François de (1555—1628)

マレルブ。佛國宮廷詩人。彼の藝術觀の要點は次のやうである。詩は合理的であらねばならぬ、曖昧、不注意、瑣事、擬想像を除去すべきであると。彼の詩は、用語文章の純潔、洗練を以つて稱せられた。ブアローは『詩論』中にマレルブを稱揚して、詩史の上で、最後に來た人はマレルブであるが、しかも用語文章の洗練を以つて、詩の高尙な進路を、始めて指示したのも此人である、と言ふ意味を述べてゐる。フアデーに従へば、所謂マレルブ派なるものは、此

詩人の死後四十年ほど経てから起つてゐると。彼の全集で Ludovic Lalanne の出版 (一八六二—一八六九年) 五巻は最も正確と言はれてゐる。(二七、一六、二六九)

Mallarmé, Stéphane (1842—1898)

マラルメ。文學界では一方の大家であつたが、實生活は極めて單純で、變化がなかつた。英語の教師として少額の俸給に満足してゐた。Poésies complètes (1899), Vers et prose (1893), Divagations (1897). 外にポーの優れた翻譯がある。(二七、一六、一三)

Mambrun, Pierre (1600—1661)

マムブルン。ジューズイット教班に居た詩人。Constantinus (1658), Dissertation de poemate epico (1652). (二、二六、八九、九〇)

Marcus Aurelius (121—180)

マーカス、オーリリヤス。ローマ帝。在位一六一—一八〇年(我國の成務帝三十一年—五十年)。英譯名 Meditations (冥想錄) は、政務或は軍務の餘暇に書かれたもの。ルナン、ミル等の尊重した名著。(107、107)

Medea.

メディア。ギリシャ神話。妖術に長じた女。アジアのコルキス國王の女で、金羊毛捜索隊の長ジェイソンの妻となつてコリンスに往つたが、ジェイソンが、コリンス王女に愛を寄せたので、彼女は嫉妬の餘り、王女と己が實子を殺して、アセンズに逃れ、國王イーリュースと結婚し、ミダスを生む。後コルキスに歸る。ボムベイで發見された繪から推定すれば、ティモマクスの繪畫は、メディアが鞘のままの劍を手にして、子供の遊んでゐる様を見詰めてゐる様子であると。(六四)

Mercur.

メルキュル。一六七二年 *Donneau de Vize* の創刊した新聞。最初 *Mercurie calant* と稱し、一七二八年 *Mercur de France* と改題。大革命時代から休刊したり、或は再興したり、種々の難關を経、一八五三年全く廢刊となつた。文藝には多大の貢獻をなした刊行物で、一時シャトープリアンが管理したこともある。(六七)

Mill, John Stuart (1806—1873)

メル。Autobiography (1873). (三三—三六)

Milton, John (1608—1674)

メルトナ。L'Allegro, Il Penseroso, Comus, Lycidas 等を見よ。(三三、三四、三六、三六)

Miranda.

ミランダ。シェークスピア『テムベスト』中の女性。(三九)

Molière (1622—1673)

モリエル。此名はステージ・ネームで、本名は *Jean Baptiste Poquelin* である。Le bourgeois gentilhomme (1670), Les femmes savantes (1672). (四一、四二)

Montagu, Elizabeth Robinson (1720—1800)

モンタギュー夫人。ヨークに生れ、サンドウィチ伯家に嫁ぐ。朝夕來客多く、英國首都のデフン夫人(佛國社交界の花形、1697-1780)と言はれた。石炭人夫間に評判好く、又毎年五月一日祭には煙突掃除人を歓迎した。Genius of Shakespeare としふ著がある。(ブルー、ストキン
グ、クラブ参照)(七)

Mozart, Wolfgang Amadeus (1756—1791)

モーツァルト。ザルツブルグに生れ、ウィーンにて歿。三歳の頃から音楽に親んだ。一代の作曲六百二十餘種に及ぶと云ふ。(二二一、二三)

Muses.

ムース諸神。ムルナミアンを見よ。(六五)

Musset, Alfred de (1810—1857)

ミュゼー。十八歳の時、ド・クインシーの『オピウム、イーター』を譯した。La confession d'un enfant du siècle (1836), Contes d'Espagne et d'Italie (1829), Un spectacle dans un fauteuil (1833), Les Caprices de Marianne (1833), Nouvelles (1840), (二三、三四、三五、三六) Muzio, G.

ムーチオ。Arte Poetica (1551)の著者。詩文の上に卑俗不徳を避けて、純潔を主とすべきを説き、同時に單に自然を模倣するのではなく、『然るべき筈』の自然模倣、即ち實らしい事を標準とした模倣論を説いた書であると。(二二)

N の部

Napoleon Bonaparte (1769—May 5, 1821)

ナポレオン。(三三、三六)

Nemesis.

ネシシス。ギリシヤ神話、世人繁榮の適當な釣合を守る女神。正當な度合を越えて榮える者には罰を加へる。故に應報或は復讐神の意義もある。(二七、二七四)

Nepenthe.

ニペンシ。又は Nepenthes, 猪籠草属。ギリシヤの詩人が、憂苦の念を除く藥劑と稱したものの。詩文にはニペンシの形を用ひるのが普通であると。(九九)

Nerval, Gérard de (1808—1855)

ネルヴール。Gérard Labrunie の改名。軍醫の子。パリに生る。精神病のために縊死。フ

ウストの翻譯者。Les Filles du fen (1854), Les Illuminés ou les précurseurs du socialisme (1852). 詩集は一八七七年出版。(二二)

Newman, John Henry (1801—1890)

ニーマン。一八四五年ローマ教徒となり、一八七九年カーディナル(ローマ法王廟の參議官)に任ぜられた。Essays, Critical and Historical (1872), Apologia pro via sua (1864), The Idea of a University (1852) 彼は、John Keble (1792—1866)と共に、所謂オクスフォード運動(英國宗教史上、自由主義と合理主義に反對した熱烈な運動)の巨頭であつた。此運動は一八三三年から約八年間続いたもので、文學とも密接な關係がある。(五二)

Niecks, Frederik.

ニークス。Programme Music の著者。(二五)

Nietzsche, Friedrich Wilhelm (1844—1900)

ニーチェ。Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik (1872), Unzeitgemässe Betrachtungen (1873-1876), Also sprach Zarathustra (1883-1884), Zur Genealogie der Moral

(1887)等。傳記は彼の妹 Elisabeth Förster-Nietzsche 著(一九〇七年)を見よ。(一〇六) Novalis (1772—1801)

ノヴァリス。Friedrich von Hardenberg のペンネーム、祖先の領地名をとつたものである。Heinrich von Ofterdingen, Hymnen an die Nacht, Die Lehrlinge zu Sais, Geistliche Lieder 等。「ハイムリヒ」の『青い花』はロマンティック象徴として名高いものである。(四、六、九、一四、一六、一七)

〇の部

Olympus.

オリムパス。古代地理には此名が諸處に在る。特に名高いのは、セサリーとマセドニアの國境に聳え、諸神が居住すると言はれる山(九七〇〇呎餘)。故に天の義を有す。諸神とは、Zeus,

Hera, Pallas Athene, Apollo, Artemis, Ares, Aphrodite, Hermes, Hephaestus, Hestia, Poseidon, Demeter の十二神である(センチユリー辭典に據る)。(二四八、二四九)

Orinoco.

オリノコ。南米ヴェニズエラの河。(一〇二)

Ossi.

オサ。古代の山名。ギリシヤ、セサリー東部の山。今のキサヴ*(六四〇〇呎)。ピリオン山にオサを重ねるとは、困難に困難を重ねる意味に用ふ。(二二七)

Ossian.

オッシャン。傳説によれば、三世紀頃のアイアランド英雄で、Ossin 又は Oisín といふ者があつた。アイアランド、或はスコットランドに傳へられた詩歌、またはロマンスに、彼の事蹟があり、尙それ等の詩歌物語は、彼の作であると言はれてゐる。是等を蒐集して翻譯したのが所謂オッシャン集で、編纂者は James Macpherson (1736-1796) である。一七六一年及び同六三年の二回に發行し、更に全部をまとめて一七六五年に發行した。發行當時、其眞偽につい

て議論が起つたが、今日の研究では、昔物語や、古歌に基いたに相違ないが、大部分編纂者自身の創作であるといふことだ。しかし、眞偽の問題は別として、此詩集はロマンティック運動に、強い刺激を與へた。殊にドイツ文學に少なからぬ影響を及ぼした。これは散文詩といふべきもので、非常に感傷的で、憂愁の趣が多い。(二二九)

P の部

Pallas Athene (Athena).

パラス、アシーニ。或はアテナ。パラスは尊稱で、處女といふ意味。此語のみでも此神を意味す。知識、藝術、科學、正義の戦の女神。特にアセンズの守護神。ローマ神話では其 Minerva を此神と同一に見てゐる。(二四一、二四二)

Pan.

パン。ギリシヤ神話。牧場、森林、羊、山羊などの神。音楽舞蹈を好む。本書第七四頁のパン神舞蹈の圖は、ハーキュレニウム（ヴェスヴィアス山麓に在つて、往昔ポムペイと共に埋没した町）から發掘された壁畫の模寫である。（二四八）

Parnassians.

バルナシアン派。一八六六年、佛國青年詩人等の詩集 *La Parnasse contemporain* が出版された。Leconte de Lisle, Gautier, Théodore de Banville, Baudelaire, Ricard, Catulle Mendès, Laprade などが關係者で、詩集は藝術のための藝術主義の宣言であつた。同様の詩集は同六九年及び同七六年に出版。バルナシアンとは、ギリシヤのバルナサス (Parnassus) 山から來た語で、神話によれば、この山はアポロー及びミュージーズ諸神 (Clio, Euterpe, Thalia, Melpomene, Terpsichore, Erato, Polymnia, Urania, Calliope) の九神で、音楽、詩歌、舞蹈、修辭、雄辯などの神) の集る處である。轉じて詩文の府、又は詩集の義。(レコント、ド、リール参照) (二六六)

Parthenon.

パーシノン。アシーニの神殿。アセンズのアクロポリスに、紀元前四四七年から四三八年の

間に建てられた。紀元後第五世紀頃までは無事であつたが、キリスト教の世となつて改造され、更に一四五六年アセンズが、トルコ人に占領されてから後、甚しく毀損され、なほ一六八七年ヴェニスとトルコの戦争の際、爆弾のために無残に破壊された。(二四二、二四三、二五二)

Pascal, Blaise (1623—1662)

パスカル。Pensées (Léon Brunschwig 校訂版一九〇四年)。(四、一〇六、一五、二二、二四)

Pater, Walter (1839—1894)

ペーター。ロンドンに生れ、オクスフォードにて歿。Renaissance (1873), Marins the Epicurean

(1885), Imaginary Portraits (1887), Appreciations (1889)。(七、一三)

Patrizzi, Franceco (1529—1597)

パトリッチ。伊國哲學、科學者。プレトオを説く。Della Poetica (1586) は歴史と本論の二部に分れ、本論にアリストートル『詩學』に對する反對意見が述べてある。Nova de Universis Philosophia (1591) はアリストートル哲學の批評。(三、三、五)

Paul, Saint (?—67?)

使徒パウロ。(二六六)

Pelion.

ピリオン。古代地理名。ギリシヤ、セサリーの山。今のザゴラ或はブレンディ(五三二〇呎)。

(二七)

Pelops.

ピロプス。ギリシヤ神話。タンタラス神の子。タンタラス、其子を神の犠牲として煮て身體を切斷したが、諸神はこれを知つて、其肉を喰へなかつた。只一人デミーター神が肩の肉を食つた。諸神はピロプスの肉を糺ぎ合はせて蘇生せしめたが、肩の肉が足りないので、象牙で補つた。此故にピロプスの子孫は、肩にその特徴を傳へた。ピロプスは、其後ペロポネーサスに勢威を振つたとすよ。(二五二)

Pepys's Diary.

ピープス日記。Samuel Pepys (1633-1703) の日記(一六五九年大晦日と同六〇年元旦—一六六九年五月末日)で、イヴリンの日記と並び稱されるもの。筆者は王政復古後の官廳及び學

界に重要な位置を占めた人。此日記は社會各方面の事項に亘つた觀察で史料としても貴重である。出版は一八二五年。(二九五)

Peter Pan.

ピーター・パン。英國 James Matthew Barrie (1860—) の少年劇の中心人物で、萬年少年。妖精、海賊、インディアンなどの間に、少年少女等と冒險をなす。(二三五)

Petrarch, Francesco (1304—1374)

ピトラーク。ヒュマニズムの父と稱された。ルネサンスの人ではないが、古典研究を奨励した點で、ルネサンス氣運の先驅となつてゐる。(一〇七、二六一)

Phillimore, Sir Robert Joseph (1810—1885)

フィリモア。英國の法官。「ラオコオン」の翻譯(一八七四年)。(四六)

Piso.

ピソオ。ローマ史上名門の家名。ホレースの詩話は Lucius Calpurnius 及び其二子に宛てたものである。ルシヤスは勤勉、溫和、智慧をもつて稱せられた行政官で、ホレースの死後、な

は長く生存してゐた。(八)

Plato. (427—347 B. C.)

フレトオ。彼の美學思想を研究するには、Symposium, Phaedrus, Philebus, Republic, Cratylus, Gorgias, Laws 等を見よ。(三、三三、三三、九一—一〇八、二〇—二二、二四、二七一—二八、三三、三三、二七、一六、一六、三三、三四、三三、三六、二五、二五、二五、二五)

Plutarch (46—120?)

プルターク。ギリシャ史傳家、又雜文家として數種の著がある。シモニディズの語及びレッシングが題辭に用ひたプルタークの語は、アセンズ人を論じた中にある。「シモニディズは、「繪畫は無言の詩、詩は有聲の繪畫なり」と言つてゐる。畫家の表はすものは、今起りつつある事で、史家は事の終つたのを語る。一は色彩と形姿で表はし、他は言語と文章で表はす。兩者の相違は只模倣の材料と方法に在る。兩者は同一の對象を有す。優秀の史家とは、物語の情熱及び人物に、恰も繪に描かれたやうな形象の連続を起す人である云々。」(七、六一)

Poe, Edgar Allan (1809—1849)

ポー。The Colloquy of Monos and Una, The Imp of the Perverse, The Poetic Principle, The Philosophy of Composition, The Rationale of Verses, The Power of Words. 此他詩集、短篇小説等。彼の詩の定義は、詩論の中にある。詩的情操は、繪畫、彫刻、建築、舞踊、音樂の内に發展する。言語の詩を、簡単に定義すれば、美の節奏的創造である。其唯一の判定者は「嗜好」である。詩は智性や、良心と、只傍系の關係あるのみである。偶然といふこと以外に、詩は義務とか、眞理とかに關與しないものであると。(二六、一八、一八、三三、二六)

Poincaré, Jules Henri (1854—1912)

ポアンカレ。La valeur de la science (1904). 佛國政治家ポアンカレの親族である。此政治家の弟も亦有名な科學者である。(三九、三〇)

Polonius.

ポローニヤス。シェークスピア『ハムレット』中の人物。(二四)

Polyphemus.

ポリフイマス。(二九)

Pope, Alexander (1688—1744)

ポープ。英譯 The Iliad (1715-20), 英譯 The Odyssey (1725-26), The Essay on Criticism (1711), The Rape of the Lock (1712), The Dunciad (1728). (一〇三三、三三三、三四)

Prospero.

プロスペロオ。シェイクスピア『テムベスト』の主人公。(二二九)

Protagoras (481?—411?B. C.)

プロタゴラス。自らソフィストと稱した最初の人。「人は萬物の尺度」といふ語を遺した學者で、また授業料を取つた元祖。一學生から約四百ポンドを徴收したと。文法を組織立てたのも此人である。(二七五)

Q の部

Quintilian (35—95)

クイントゥリヤン。生存年代は推定。ローマの修辭學者。生國はスペイン。Institutio Oratoria (一〇一四)

R の部

Rabelais, Françoise (1490?—1553)

ラベレー。佛國のユーモリスト。Gargantua (1532-35), Pantagruel (1533-頃か)の著者。ヴォルテールは彼を評して、『見頃のラベレーは道化者の殿様である。一國民は、此職業の者二人を要しないが、一人は是非とも必要である』と。しかし彼は倫理學及び文學史上、極めて重要な地位に在る文學者である。騎士道ロマンスを刺激したのは彼で、又スコラ哲學(煩瑣哲學)に大打撃を加へたのも彼である。(二六八、二六九、二七一、二六二)

Racine, Jean Baptiste (1639—1699)

ラシーヌ。(11)

Raphael, Sanzio (1483—1520)

ラファエル。(11)

Rapin, René de (1621—1687)

ラピヤ。Réflexions sur l'Art Poétique d'Aristote (1674). (24)

Renaissance.

ルネサンス。或はルネッサンス、リネイサンス、レネイサンス。これに関する研究書目は、餘りに多数で、有名な書を擧げるだけでも數頁を要する。此一大廻轉期の大要を知らうとする人には、小冊子であるが Edith Sichel's The Renaissance 或は J. Basil Oldham's The Renaissance などが簡單で宜しからう。殊に前者には研究書目が掲載してある。(五、六、八、一〇、一一、一二、一三、一四、一六、一七、一八、四、五、五、六、七、九、一〇、一三、一六、一六、一七、一七、一七、一八、一八、一八、一八、一八)

文藝家傳 第二卷 第六号 我々がかり

Renan, Ernest (1823—1892)

ルナン。Souvenirs d'enfance et de jeunesse (1883). 有名なイエス傳は一八六三年出版。(三六、

三六、三六、三六—三六、三六、三六、三六)

Reynolds, Sir Joshua (1723—1792)

レノルズ。英國ロイヤル、アカデミー(一七六八年創立)最初の總裁。アカデミーの授賞式に於ける講話が有名な Discourses (1769-1790) である。ジョンソン博士、パーク、ゴールドスミス等と親友で、一七六四年彼等の創立した文學クラブは、此畫家の提案である。(二六、二七、二六)

Rimbaud, Arthur (1854—1891)

ラムボ。放浪と冒険で一生を終つた詩人。十歳からペンを執り、十五歳から家を飛び出し、十七歳で La Bateau ivre を書き、次で Une Saison en Enfer を公にした。十九歳で筆を捨てて北部アフリカに流れ入つて、商業又は冒險生活を送り、脚部の疾患のため、マルセイユに歸り、同地で歿した。ヴェルレーヌと醜い事件があつた。Les Illuminations は、ヴェルレーヌが一

八六六年、ラムポーは死んだものと思つて發行した詩集で、この中に母音の色彩のことを書きしめる。"A noir, E blanc, I rouge, U vert, O blue, voyelles. (一三〇)

Robortelli, Fr.

ロポルテリイ。「詩學」の譯註者。(アリストートルの項参照)(一〇)

Rochelave, S.

ロシ・ノラヴ。 (四三)

Rococo.

ロココ。第十七世紀末から第十八世紀中頃まで流行した建築裝飾の様式。字義は Rock Work. 岩石、貝殻、渦卷、繁茂する葉などを無意義に模倣した奇異な、仰々しいもの。バローク式と共に藝術界の化物様式である。(バローク参照)(七一)

Rodin, Auguste (1840—1917)

ロダン。「娼婦であつた女」は Francois Villon (1431-1484) の詩 La Belle Heaulmière を本とした作。詩は美しかった青春時代の華やかな生活を追懐して歎息する女を書いたものであ

る。Heaulmière とSと語は、マッシュー、アーノルドの説明によれば、娼婦が用ひた髪飾から出たものである。(一三〇・一三二・一三五)

Rome, Sack of.

ローマ掠奪。一五二七年五月。法王クレメント第七世が、神聖ローマ帝國チャールス第五世帝と不和を生じた時、ブルボンの將軍、無給の兵を率ゐてローマに侵入、法王を擒にし、掠奪を恣にし、法王の都は鐵火の巻となつた。(二六八)

Rossetti, Dante Gabriel (1828—1882)

ロゼティ。所謂ラファエル前派の中心たる詩人また畫家。The House of Life, The Blessed Damozel, Ballads and Sonnets. (一三三・一三九)

Rossini, Gioachino Antonio (1792—1868)

ロシニー。伊國音樂家。(一八一)

Rostand, Edmond (1869—1920)

ロスタン。Cyrano de Bergerac (1897) の作者。(一三五)

Rousseau, Jean Jacques (1712—1778)

ルソー。Discours sur les sciences et les arts (1750), Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité (1755), Lettre sur la spectacles (1758), Nouvelle Héloïse (1761), Emile (1762), Le contrat social (1762), Confessions (1782-1788), Rêveries d'un promeneur solitaire (1782) 等。ルソーの研究書は實に汗牛充棟の形容句を文字通り應用して可いくらゐである。佛國ではルメートルの研究が「特色あると思ふ。パビット氏の『ルソーとロマンティシズム』には、かなり詳細に論評してある。(三、三三、八〇—八五、九三、九五—九七、一〇二—一〇六、一〇八—一一三、一二一—一二三、一二四—一二七、一三五—一三九、一四一、一四九—一五三、一五五、一五九—一六三、一七〇、一七三、一七五、一七六、一八〇、一八六、一八七、二〇四—一〇九、一〇九、一一一—一二四、一二七、一二〇、一二三、一二五、一二六、一二三、一二三、一二五、二〇〇—二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一六、二一九六)

Royal Society, The

ロイヤル・ソサイティ。王立科學協會。一六六〇年ロンドンに組織され、同六二年法人組織。科學、特に自然科學の進歩を期する學會。(四一)

Rymer, Thomas (1641—1713)

ライマー。英國の歴史編纂者。一代の大事業は Foedera (一七〇四年第一卷出版) で、一七〇一年以來、彼の時代迄の英國の對外關係文書編纂である。外に The Tragedies of the Last Age Consider'd (1678), A Short View of Tragedy (1693), ラバン詩論の翻譯(一六七四年)、シセロオの翻譯等がある。(二六、二八、二六、二七、二九)

S の 部

Sainte-Beuve, Charles Augustin (1804—1869)

サント・ベヴ。最初醫學を學び。Portraits littéraires (1862-1864), Nouveaux lundis (1863-1870), Portraits de femmes (1870), Portraits contemporains (1869-1871), Premiers lundis (1874-1875), Lettres à la princesse (1873), Correspondance de Sainte Beuve (1877-1878),

Nouvelle Correspondance (1780) 等。彼の評論は一八四八年を境として、前後二期に分つことができる。彼の圓熟した評論は、後期に屬す。しかし熱烈な詩的趣旨は、前期のものに在る。境界線になつてゐる此年に、彼はリエージュ大學に招かれて、佛國文學を講じたのである。(八六、一三〇、一五三、一五五、一五八、一六四、一六三、一四四、一四六、一七六)

St. François de Sales (1567—1622)

フランソワ・ド・サル。ジ・ネヴァ司教。サヴォイの名家に生る。柔和温順で、然も堅固な意志の人として評判の高かつた名僧。一六六五年聖徒に列せらる。英譯名 Introduction to a Devout Life 及び Treatise on the Love of God は名高著述。(一七三)

Saint-Germain.

サン・ジェルマン。佛國ルイ第六世以來の王宮所在地。セーヌ川左岸に在つて其森林は一萬ヘーカー餘と云ふ。(一三)

Saint-Pierre, Bernardin de (1737—1814)

サン・ピエール。ハーヴルに生れ、土木技師として露國其他を巡り、一七七一年パリに出でて

ルソーの友となり、その感化を受けてペンを執つた。Voyage à l'île de France (1773), Études de la nature (1784-88), Paul et Virginie (1789), La chaumière indienne (1791), Harmonies de la nature (1815) 等は有名な作である。彼の一生は甚だロマンティックで、平和な生活は只其晩年だけであつた。彼はルソーに好く似た性質であつた。一千のバラの楽しみよりも一本の刺の痛みを強く感ずると言ひ、或は最善の社交界でも、若し其中に悪い嫌な人間一人居れば、悪と思はれるといふ意味を述べてゐる所から見れば、感傷的氣質の人であつたことが分る。(一五、一五五、一五七)

Saintsbury, George Edward Bateman (1845—)

セーンツベリー。英佛文學の史的研究數種の外に、A History of Criticism (1900-1904), A History of English Prosody (1906), Historical Manual of English Prosody (1914) 等がある。最後に掲げた書は、英詩の形態研究には簡便な参考書である。(八六)

Santayana, George (1863—)

サンタヤナ。マドリッドに生れた米國思想界の人。The Sense of Beauty (1896), The Life

of Reason (1905-1906), Poetry and Religion (1911), Dialogues in Limbo (1900) 等。プラグマティズムの反對者で、著書には以上の外に詩集、論文集等數種ある。(一〇七、三三)

Satyr.

サター。ダイオナイシス神の仲間。山林に住み、酒色舞踏を好む。(希臘神話)。(一四八)

Saunderson, Dr. Nicholas (1682—1739)

ソーンダスン。有名な盲目の數學者。英國ヨークシャーに生れ、滿一歳になつた頃、天然痘の爲に盲目となつた。古典と佛語に通じ、數學を學んで、ケムブリヂのクライスト大學教授となり、同地で終つた。ディドロワは此數學家を借りて自説を述べた、『盲目に關する書』が之である。(一三三)

Scaliger, Julius Caesar (1484—1558)

スカリジヤ。伊國ヒュマニズムの大家。歐洲諸國に少からぬ感化を及ぼした。其詩論 Poetics は一五六一年に出版された。彼の子 Joseph Justus (1549-1609) は佛國アゾーンに生る。新教徒中の碩學で、シネヅ、ライデンで講義。(一八、二六九、二七二)

Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph von (1775—1854)

シエリング。System des transcendentalen Idealismus, Philosophie der Kunst, Ueber Dante in philosophischer Beziehung, Ueber das Verhältniss der bildenden Künste zu der Natur (1807) (二二二)

Schiller, Ferdinand Canning Scott (1864—)

シラー。英國のプラグマティスト的哲學者。Riddles of the Sphinx (1891), Humanism (1903), Studies in Humanism (1907), Tantalus or the Future of Man (1924). (一七一、一七四)

Schiller, Johann Christoph Friedrich von (1759—1805)

シルレル。美學的研究論文は Briefe über die ästhetische Erziehung des Menschsein, über Anmut und Würde, Ueber naive und sentimentalische Dichtung 等。一七九四年創刊の雑誌 Die Horen は同九八年迄繼續された。ゲーテ、シルレルの最初の會見は、一七八八年であつて、はじめゲーテは後進の詩人を左程に重く見てゐなかつたが、是等の論文の發表された前後から親交を結んだ。最初の會見の頃、ゲーテは既にスツールム、ウンド、ドラング熱から

醒めてゐて、シルレルには尙ほその熱が残つてゐたから、十分理解し合ふまでに至らなかつたのであらう。(七九、一七九、二四〇、二五二)

Schlegel, August Wilhelm von (1767—1845)

シュレーゲル。ゲッティンゲンに學ぶ。エーナ大學、ベルリン大學、ボン大學にて講義。佛、伊、奥、瑞典等を漫遊。ボンにて歿す。シェークスピアの翻譯。印度叢書發行。雜誌『アテネウム』發行。Ion (1803), Vorlesungen über dramatische Kunst und Literatur (1809—11). 次を見よ。(二〇、九六、一三三)

Schlegel, Karl Wilhelm Friedrich von (1772—1829)

シュレーゲル。前者の弟。ゲッティンゲン、ライプチヒに學ぶ。ドレスデン、ヘルリン、エーナに居り、パリに赴いて東洋語研究。一八〇三年ローマ教徒に改宗。後ヴァーリン、フランクフルトに住し、ドレスデンにて歿す。抒情詩の外に、Fragmente (1797), Lucinde (1799), Alarcos (1802), Ueber die Sprache und Weisheit der Indier (1808), Vorlesungen über die Geschichte der alten und neuen Literatur (1815) 等の著がある。(七九、九六、一三三、二二三)

アウグストの妻は Karoline (1763—1809), フリードリヒの妻は Dorothea (1763—1839). 兩女性共にロマンティック派の活動とは密接な關係がある。前者は後にシェリングと結婚した。

Schleiermacher, Friedrich Daniel Ernst (1768—1834)

シュライエルマヘル。クローチエ氏は彼を評して、美學を形而上學から分離し、美といふ概念を拒んで、美的活動を見た哲學者である、即ち美的事實は人間活動の産物であると見た點に於て優れてゐると。ドイツ、ロマンティック派と親交があつた。美學講義、Reden über die Religion (1799), Vertrauten Briefe über Schlegel's Lucinde (1801), Monologen (1801). (二二三) Scholastic Philosophy.

スコラ哲學。中世紀に、神學を中心とした哲學である。その根本思想は(一)キリスト教の信仰によつて確實不易の眞理を得てゐる、(二)其信仰の合理的たるを證明するのが哲學の任務である。故に哲學は宗教に對して獨立でなく、婢僕の位地に在る。字句の末に至るまで論理を用ひた。煩瑣哲學と譯す。なほ煩瑣な空理を述べる學風を輕蔑の意で、スコラ的とす。 (二二三) Schopenhauer, Arthur (1788—1860)

- シレーンハウエル。Die Welt als Wille und Vorstellung (1818). (10頁 10頁)
- Schubert, Franz Peter (1797—1828)
- シールルト。境國音楽家。Erlkönig, The Wanderer, The Trout, Who is Sylvia?, Hark, the Lark 等。(1頁)
- Schumann, Robert (1810—1856)
- シーマン。獨國音楽家。Das Glück von Edenhall, Der Ross Pilgerfahrt, Genoveve, Manfred, Faust, Paradise and the Peri, Fantasiestücke 等。(1頁 1頁 1頁)
- Scott, Fred Newton.
- スコット。(ゼーリー参照(四))
- Schadwell, Thomas (1640—1692)
- シアドウエル。英國劇作家、桂冠詩人。ドライデンと争つたので有名。(二頁)
- Shakespeare, William (1564—1616)
- シークスピア。Shakspeare, Shakespear, Shakspeare と書いた例もある。研究には坪内博士

- の『シークスピア研究叢』を見よ。(二頁、二六、二六九)
- Shaw, George Bernard (1856—)
- シロー。英國現代の最も特色ある脚本家、また評論家であることは言ふまでもない。彼を研究する参考書には、Holbrook Jackson, Julius Bab, G. K. Chesterton, Archibald Henderson, Edward Shanks, J. S. Collis 等シロー評論がある。(四六)
- Shelley, Percy Bysshe (1792—1822)
- シヘリー。英國サセックスのホーシナム附近に生れ、伊國ヴァレジオーの海にて溺死。Alastor, To a Skylark, A Defense of Poetry, Queen Mab, Prometheus Unbound, The Cloud, The Revolt of Islam, Epipsychidion, The Cenci 等の作に特色が現れてゐる。彼の第二の妻は、女権論者ウルストンクラフトの娘である。(二五、二七、一五、一〇)
- Sidney, Sir Philip (1554—1586)
- シドニー。英國の政治家であり、武人であり、文學者であつて、所謂紳士の典型として今日なほ尊敬される人。Arcadia 物語の外に、Astrophel and Stella, Defence of Poesie の著があ

る。彼が和蘭ズトフェンの戦場で陣歿した時には、詩人スベンサーを始め、朝野の名士の作つた挽歌百餘種に及んだといふ。その人望のあつたことが推知される。(二七二、二九五)

Simonides (556—469 B. C.)

シモニディーズ。年代は推定である。ギリシヤのヴォルテルルと言はれる人。多島海のシオス島に生れ、アセンズに出で、ヒバルカスの宮廷に入る。更にセサリーに入り、マラソン戦後再びアセンズに歸つたが、シシリイのヒエロオ王に招かれ、同地で一生を終つたといふ。彼は當時非常に評判の高かつた詩人で、政治界にすら少からぬ勢力があつたらしい。詩に對して報酬を要求したといふので、愆張といふ非難もあつたが、今日から見れば賣文業の元祖である。彼の詩や警句は、断片として傳はつてゐる(ブルターク参照)。参考書 J. A. Symonds (Studies on the Greek Poets), T. Bergk (Poetae Lyrici Graeci), E. Cesati (Simonide di Ceo, 1882) 等。この名はサイモニディーズとも發音する。(セ、ハ、六、六)

Smith, Adam (1723—1790)

スミス。(SK)

Smithson, Henrietta.

スミスン。(一、七、一、一)

Socrates (471?—399 B. C.)

ソクラテース。(一〇四、一〇六、一一〇、一一一、一一四、一一五、一二一、一二三、一二四、一二九)

Sophist.

ソフ・スト。詭辯學徒。(一〇四、一二五)

Sophocles (495—406 B. C.)

ソフ・クリーズ。彼の劇は百篇餘で、其外に詩もあつたさうだが、大部分は失はれ、今日傳はつてゐるのは左の七劇で、創作の順序は正確に知る事ができない。Antigone, Electra, Trachinian Maidens, Oedipus Tyrannus, Ajax, Philoctetes, Oedipus Coloneus. (一四四、一〇六、一一三、一二六、一二九)

Sparta.

スパルタ。ギリシヤ古代史上、アセンズの文に對して武の發達を代表する都會。傳説によれ

ば、ジウスの子ラセテ、モンの開いた地で、名稱は彼の妻の名であると。(103)

Spence, Joseph (1699—1768)

スペンス。英國の評論家。Polymetis (一七四七年出版、ローマ美術詩文の研究)。An Essay on Pope's Odyssey (1726)。(四一、四二)

Spencer, Herbert (1820—1903)

スペンサー。Education (1861), The Philosophy of Style (1882) の二書は我國で廣く讀まれたものである。彼の美學的研究を知るには、Principles of Psychology の外に、Essays, Scientific, Political, and Speculative (1858—1874) を見よ。(125)

Spenser, Edmund (1552—1599)

スペンサー。生年は推定である。英國擬古主義の詩に満足せず、ポープ流に對して清新の詩を作らうとした人々は、The Faerie Queene の作者たる此詩人に模範を求めた。擬古主義の旺盛であつた時代には、此詩人を顧る者少く、一七一五年初めて傳記、用語解、批評附の著作集(編者は John Hughes) が出版された位だ。この頃多少の模倣者が出で、第十八世紀の中頃か

ら、所謂スペンサー復活の色彩が鮮明になつてゐる。(三、四、八六、八七、三五、三六)

Spingarn, Joel Elias (1875—)

スピンガーン。ロムビア大學教授。Critical Essays of the 17th Century (1908) 三卷は英國批評に貢獻した論文の編纂。A History of Literary Criticism in the Renaissance (1912) は第十六世紀を中心として其前後に及んだ伊佛英評論の史論。外に創造的批評論がある。(101)

Spinoza, Baruch (Benedict) (1632—1677)

スピノザ。The Philosophy of Spinoza (J. Ratner). (122)

Staël, Madame de (1766—1817)

スタエル夫人。佛國財政家ネケルの娘。第十八世紀末から十九世紀初期へかけての新興文學に異彩を放つてゐる女流文學者。歐洲の第一人者たうとしたナポレオンは、歐洲の第一女性たうとしたスタエル夫人を放逐した事件があるだけに、彼女の一生には、文學的活動以外の興味がある。Lettres sur Rousseau (1788), De l'influence des passions (1796), De la littérature considérée dans ses rapports avec les institutions sociales (1800), Delphine (1802),

- Corinne (1807), De l'Allemagne (1813). (K0)
 Stendhal (1783—1842)
 スタンタール。Marie Henri Beyle のペンネーム。Armanace (1827), Le Rouge et le Noir (1830), La Chartreuse de Parme (1839), Histoire de la Peinture en Italie (1817), De l'Amour (1822), Racine et Shakespeare (1823-25). 小説は心理解剖に特色がある。(1題)
 Stephen, Sir Leslie (1832—1904)
 ステファン。タムブリチ出身。ローマンルン雑誌主筆。國民傳記辭典編輯。The Playground of Europe (1871), Hours in a Library (1874-1879), History of English Thought in the 18th Century (1876). (140)
 Sterne, Laurence (1713—1768)
 スターン。英國のノーキリントン。Tristram Shandy (1760) Sentimental Journey through France and Italy (1768). (K11)
 Stoke's Encyclopadia of music.

音樂百科辭典。一八四頁七行目「著」は衍字。編者は L. J. de Bekker. (一八四)
 Strauss, Richard (1864—)

シュトラウス。ウィーンに生る。幼時より音楽を修め、同地大學にて美學及び哲學を學ぶ。Macbeth (1887), Don Juan (1888), Don Quixote (1897), Also sprach Zarathustra (1896), Symphonia Domestica (1904), Ariadne auf Naxos (1912), Der Rosenkavalier (1910), Josephs Legende (1914) 等は有名な樂曲。(141' 142' 140' 141' 142' 143' 144')

スツールム、ウインド、ドラング。文字通りでは「暴風雨切迫」の意であつて、颶風勃起と云ふ譯語もあるが、少しくむづかしいやうに思ふ。これは第十八世紀のドイツにおける新文學運動を稱した語で、大體一七七〇年頃から十二三年間の動搖期をさす。此名稱は Friedrich Maximilian von Klingers (1752-1831) の劇 Sturm und Drang (1776) とその題に基つて云へる。その運動の宣言と見るべきものは、一七七三年發行の「クマンナント Von Deutscher Art und Kunst」である。此冊子にはヘルデル、ゲーテ、Möser (1720-1794) 等が寄稿してゐる。2

の運動の最高潮は、ゲーテの Werthers Leiden (1774) または前記のクリンゲルの劇の發表された頃で、シルレルの Die Räuber (1781) の出た頃から氣勢衰へ、Don Carlos (1787) の出た頃終期に近づいたのである。言ふ迄もなく、擬古文學に對する破壊運動と社會の慣習に對する反抗であつて、ロマンティック運動の先驅となつたものである。(五〇、七六、八〇)

丁の部

Taine, Hippolyte Adolphe (1828—1893)

トーム。L'Idéal dans l'art (1867), Philosophie de l'art (1865), Les philosophes classiques au XIX. siècle en France (1868), Essais de critique et d'histoire (1858), Histoire de la littérature anglaise (1863-1867), De l'intelligence (1870), Les Origines de la France contemporaine (1876-1893) 等。彼は撓きず科學に仕へて、其結果の如何を豫望しなかつた。彼

の著には熱狂も、悲苦も、希望も、失望もなく、ただ絶望の忍従あるのみといふ評がある。

(一〇〇、三九、二六)

Tasso, Torquato (1544—1595)

タンオ。伊國ソレントオに生れ、ローマにて歿。Gerusalemme Liberata (1581), Rinaldo (1562), Aminta (1573) 等は名高い詩である。彼の父のベルナルドオも亦詩人で、古典叙事詩の擁護者であつた。トルクットオの Discorsi dell' Arte Poetica (1587) は、古典叙事詩の形式と、ロマンティック題材の調和、即ち統一を守りながら、變化に富む物語を叙述する詩の作成を論じたものである。彼は三十一歳頃から精神に異狀を呈して、安定の生活を送り得なかつた。(三〇一)

Telemann.

テレマン。(六)

Terence, Publius Terentius Afcr (185—159 B. C.)

テレンス。生歿年共に推定である。カーセージに生れ、奴隸としてローマに往き、後自由民

となり、文學を修めて、六篇の喜劇を遺した。Andria, Hecyra, Heauton-timoroumenos, Eunuchus, Phormio, Adelphei. 是等の作は獨創的ではないが文體と形式の雅美をもつて優れてゐる。ルネサンスには盛に讀まれたもので、サント、ブーヴヤ、ジュベールなども稱揚してゐる。時代や郷土を離れて一般人の普通な性質を巧妙に描寫してあると。(二四)

Terminus.

ターミナス。ローマ神話。境界守護神。境界決定の際、穴を掘り、其内に犠牲を入れて焼き、その灰の上に石又は木で造つた守護神の像を建てる。(九七)

Thebes.

シブス。古代ギリシヤのビオシヤの都。傳説によればダイオナイシアス、ハーキュリーズ、カドマスなどと縁ある地。またギリシヤ抒情詩人ピンダーの生地。(二五)

Thomson, James (1700—1748)

トムソン。有名な詩 The Seasons の著者。この詩は Winter (1726), Summer (1727), Spring (1728), Autumn (1730) の順序で發表された。スペンサーに倣つた The Castle of Indolence

(1748) は十五年間苦心の作。(四〇・四一・四三・六〇・一五〇)

Three Unities.

作劇法上の語である。日本語には複数を示す語法が不完全だから、此語を原語通り三統一と譯しては誤解を生じ易い。三件各自の統一とでも言はなければなるまい。三件とは劇における行動、時、場所の三の事で、統一とは、この三が各散漫、非常識、不合理でない様に纏つてゐることの意である。要するに『實らしい』と言ふ思想に基づいてゐる法則である。何處から此思想が湧いたかと言ふに、やはり、アリストートルの『詩學』が本となつてゐる。行動の統一に關しては、此書中に明記してある。次に、時の統一に關しては、ただ一箇所に『悲劇はなるべく、太陽の一回轉、或はそれより少しく長い間に制限される』と言ふ意味が述べてある。其意味は必ずしも一日とか、或は二十四時間内に事件の首尾を纏めなければならぬと言ふのであるが、伊國ルネサンスの評論家ロポルテリイや Segni (詩論、一五四九年) Maggi (詩論、一五五〇年) Trissino (詩論、一五六三年) 等が、此語を狹義に解して法則化したのである。場所の統一については『詩學』中に何等の語もない。これを説き出したのは Castelvetro (詩論、一五

七〇年)である。時に制限ある以上、當然場所にも制限が無ければならぬ、事件の推移が遠方へ亘るのは許されない、と言ふ考は、想像を用ひないで、只常識的及び現實的に舞臺を眺める人の當然推論する事である。だから、行動統一の論は『詩學』に源を發し、時及び場所についての統一論はルネサンスに仕立上げられたものである。カステルヴェトロオの論をもつて、三件各自の統一理論が完成されたわけで、此理論は幾許もなく佛英に流れ込んだのであるが、一般劇界の問題となり、また權威ある法則として見られるやうになつたのは、佛國において、コルネーユの悲劇 *Le Cid* (1639) に關する賛否の論争が盛であつた時からである。それは佛國アカデミー設立當時で、シャブラン及びバルザク (Balzac, Jean Louis Guez de, 1594-1654) の二人が伊國ルネサンス評論家の學說に據つて三法則を主張し、一六四〇年頃劇界の大勢を支配するやうになり、次で *Abbé d'Aubignac* (1604-1676) の *La Pratique du Théâtre* (1657) が公にされてから、愈よ三箇の統一法則が權威を強くしたのである。(三、九)

Tieck, Ludwig (1773—1853)

テューク。ドイツ、ロマンテック派の一人。シュレーゲルと共にシェークスピアを譯し、ま

た古代詩歌、物語を蒐集した。Prinz Zerbino (1799), *Romantische Dichtungen* (1799-1800), Kaiser Oktavianus (1804), Phantastus (1812-1817), *Dichterleben* (1826), *Der junge Tischlermeister* (1836) 等。(一七、一八、一九、二〇、二一)

Timomachus.

ティモマカス。紀元前一世紀のギリシヤ畫家。狂氣のエイジャクス及び子殺しのメディアは二名畫として評判高かつた。シーザーは此二畫に大金を拂つたと。本文「ク」は「カ」の誤植。(三)

Titan.

タイタン。ギリシヤ神話。タイタン神族の一。ユーラナス(天)ジェア(地)の間に六男六女があり、皆な巨人。巨大、強力、或は能力絶倫の人、又は事物。(五、一七、二七、三〇、三三)

Titian (Tiziano Vecelli) (1477?—1576)

ティチアン。ティチアノオの英語化。一生の大部分をヴェニスに送つた。作品は感官上の美を以つて優る。(四)

Tolstoy, Leo Nikolaievitch (1828—1910)

トルストイ。藝術論（一八九八年）、シュークスピア論（一九〇六年）。（二〇六、二〇九）

Trent, Council of.

トレント會議。一五四五年—一五六三年に亘つて開かれた全ローマ正教會議。新教に對して舊教の統一を堅固ならしめようと言ふのが會議の根本精神である。他面から言へばローマ教會の教理制度などの統一及び改善を計つて、宗教改革後の信仰界に臨まふといふのが其目的であつた。（二六八）

Trissotin.

トリソタン。モリエル劇「有識の女」中の人物。其モデルは Charles Coin.（四、五）

Troy.

トロイ。ダーダネルズの入口から三マイル半の高地、小亞細亞ヒサルリク（Hisarlik）の古跡が、ホーマーによつて永遠に傳へられるトロイである。此古跡の發掘は、一八七〇年から、獨人シュリーマン（Heinrich Schliemann, 1822-1890）によつて企てられ、彼の死後 Wilhelm Dörpfeld が、一八九一年に全部の監督權を得て、組織的に此事業を繼續し、一八九三年愈よ上

記の地をトロイと證明したのである。（六一、二五）

Turgot, Anne Robert Jacques (1727—1781)

チュルゴ。一時は、革命前の佛國を擔つて立つた大政治家。（二六）

V の 部

Vadius.

ヴァディウス。モリエル劇「有識の女」中の人物。（四、五）

Verlaine, Paul (1844—1896)

ヴェルレーヌ。ポッヒミヤン（放縦生活の人）の標本たる彼も、最初は普通人と同様の生活をしたのであるが、普佛戦争後その生活状態は一變し、殊に一八七一年ラムポーと會つてから後、愈よポッヒミヤンとなり、兩人で英白國を放浪し、仕事はせず、只飲み廻り、遂にブラッ

セルズにおいて兩人間に傷害事件を起し、ヴェルレーヌは二年間獄中の人となつた。其一生は、普通の道徳觀念から見れば、甚だ醜いものであつたが、その詩は文學史上獨得の光彩を放つてゐる。Poèmes Saturniens, Sagesse, Jadis et Naguère, Romances sans paroles, Bonheur, Amour, Parallèlement 等は有名な作である。(二五、一七、二四、二四九)

Vico, Giovanni Battista (1668—1744)

ヴィコー。伊國哲學者。Principii d' una scienza nuova (1730) は思想史上、重要な位置を占める名著であるといふ。クローチエ氏の言ふ所に據れば、美學といふものを建設したのは、此哲學者である。プレトオ以來の問題はかうである。詩は合理的か或は不合理か。それは精神的か或は肉慾的か。此疑問の解決がヴィコーの仕事であつた。プレトオは、詩を肉慾の内に見ようとしたが、ヴィコーは別方面から觀察して、人性の歴史の一時期が詩であると見た。即ち精神或は意識の働きの一形式が詩であつて、それは智性に先立つものであると。クローチエ氏自身の美學説も此處から出發してゐるのである。(三三)

Virgil or Vergil (Publius Vergilius Maro) (70—19 B. C.)

ヴァージル。Edgoués, Georgics, Æneid の三篇は後世詩人の模範としたもの。(一八、三、三七、三八、四、一〇)

Virtuoso.

ヴァチュオソ。美術通、好事家、美術品鑑定家、骨董通などの譯語がある。なほ名匠、達人、妙手の意味に用ひることもある。本來は實驗的哲學者、或は直接の觀察によつて事物を研究する人の意。實物殊に古美術品についての研究者。ドライデンの語に、『伊國人は、高雅な美術を愛し、又それ等の批評家である人を、ヴァチュオソと呼ぶ』とある。(四)

Volkmann, Ludwig (1870—)

フォルクマン。Grenzen der Künste (1903). (四一)

Voltaire, François Marie Aronnet de (1694—1778)

ヴォルテール。Temple du Gout (1733). 第十八世紀の批評と破壊力の化身は、彼であると云ふ評がある。(三九、四八、七〇、八五、四、一五、二四六、二五〇)

W の部

Wagner, Wilhelm Richard (1813—1883)

ワグネル。ライプチヒに生れ、ヴェニスにて、心臓病のため急に歿した。彼の有名なオペラ及び樂劇は次のものである。Rienzi (1838-1840), Der fliegende Holländer (1841), Tannhäuser und der Sängerkrieg auf Wartburg (1860-1861), Lohengrin (1845-1848), Das Rheingold (1848-1854), Die Walküre (1856), Tristan und Isolde (1857-1859), Siegfried (1869), Die Meistersinger von Nürnberg (1845-1867), Götterdämmerung (1848-1874), Parsifal (1876-1882)。以上の外に尙幾多の作曲がある。文學上の著述は十卷(一八七一一一八八五年)。將來の藝術論、樂劇論、宗教と音樂論等は名高し。(二一〇—二二一、二二三、二二九、二八〇、二八二、二八六、二四四)

Waller, Edmund (1606—1687)

ウォラー。英國詩人。政治界にも活動した。詩は Go, lovely Rose! の外大抵忘れられて

しまつたが、存生中は非常に評判高く、殊に聯句を巧妙に用ひたといふ點で、第一流と見なされ、ブアローの『詩論』の翻譯者ソームズの如きは、原文にマレルブとある處を、ウォラーと改めた位である。(一七六)

Weber, Carl Maria Friedrich von (1786—1826)

ヴェーベル。獨國音樂家。Der Freischütz (1820), Euryanthe (1823), Oberon (1826), Silvana (1810), Abu Hassan (1811) 等。(一四〇、一四一、一六二)

Wesley, John (1703—1791)

ウェズリー。メソヂヤニストの開祖。(七九)

Whitman, Walt (1819—1892)

ホイトマン。英國人と和蘭人の血筋を引いた米國人で、父は農業と大工を職とした。彼も給仕や、大工や、印刷職工から身を起して、新聞記者となり、一八五五年 Leaves of Grass を出して、エマーソンに認められた。彼の全集十卷は、一九〇二年出版され、O. L. Triggs が評傳を書いてゐる。(九六、一〇七)

Wilde, Oscar (1856—1900)

ワイルド。名譽の絶頂から、レディング刑務所へ突き落された奇才。The Picture of Dorian Gray (1891), Salome (1893), Ballad of Reading Gaol (1898), Intentions (1891) 等は、我國でも廣く讀まれてゐる。詩文、身章共に耽美主義の人。チェスタトン氏は彼を評して曰く、ワイルドの言を讀むと、彼が卑俗へ轉落する絶壁に立つてゐると思はれることがある、讀者が一足だけ普通の標準に戻つて見ると、彼の語は噴飯の種子である、彼はソフツに、だらしなく横つてゐるリヴァリアサンのやうである云々。(四九)

Winchelsea Anne Finch (1661—1720)

ウィンチェルシー伯夫人。夫人の詩は殆ど顧られなかつたが、ワーヅワースが激賞してから評判になつた。The Tree (一九〇三年初て印刷)・The Petition for an Absolute Retreat (1713) A Nocturnal Reverie (1713). (三九)

Winckelmann, Johann Joachim (1717—1768)

ヴンケルマン。古代美術の研究者。貧しい靴屋に生る。トリリストにて伊人のため殺さる。

Gedanken über die Nachahmung der Griechischen Werke in Malerei und Bildhauerkunst (1755), Geschichte der Kunst des Alterthums (1764). (四一、四三、四六)

Wolf, Christian (1679—1754)

ヴォルフ。ライプニッツ派の哲學者。(六)

Wordsworth, William (1770—1850)

ワーヅワース。ユーリチと共同發行の Lyrical Ballads (1798) は英國詩史上、新時代を作つたもので、同詩集第二版 (1800) の序文は英詩研究上殊に重要である。本書に引用した詩は、Tintern Abbey, The Prelude (Book I, II) I Wandered Lonely as a Cloud, Guilt and Sorrow, Ode on Intimation of Immortality 等である。(一七、二二、二四、二九、三〇、三一、三三、三四、八〇、八二、九五、一〇六—一〇八、一一〇—一一三、一三三、一四一、一四四、一四七、一五二、一五五、一五七、一七六)

Z の 部

Zola, Émile (1840—1902)

エミール・ゾラ。Le roman expérimental (1880), Le naturalisme au théâtre (1881), Les romanciers naturalistes (1881), Documents littéraires, études et portraits (1881), Nos auteurs dramatiques (1881), Une Campagne (1881). Les Rougon-Macquart 小説については、標題を掲げる必要もあるまい。佛國近世文學史家ベリシエルは言ふ、ゾラは自然主義の立法者である、フロールベルや、ゴンクール等は、此主義の創設者であるが、立法者でない、ゾラの頑強な性質、戰鬥的性向、自信の強いこと、これらは彼をして立法者たらしむるに適してゐた、彼は自然主義小説の教理を作成した人である、而して其教理の根本思想は、現實から採擇する眞實を描寫することであると。(一五、一六、一五一)

(附記) 註譯及び索引中には、本文の誤謬或は誤植も訂正してある。

(註釋及び索引終)

昭和四年二月二十日印刷
昭和四年二月廿五日發行

著者 長谷川 誠也

發行者 株式會社 博文館

右代表者 取締役社長 大橋 勇吉

印刷者 東京市京橋區本渡町七番地 櫻井 兵太郎

七星社印刷所印刷

正 價 金 貳 圓

發行所 東京市日本橋區本石町 株式會社 博文館
振替口座東京二四〇番

不 許 複 製

Shosagi Tero

石橋智信	メシヤ思想を中心としたる イスラエル宗教文化史	七判洋布裝函入 六〇頁	定價五・二 送料二・四〇
姉崎正治	宗教の改造	四判洋布裝 二六頁	定價二・五 送料一・四〇
姉崎正治	高山樗牛と日蓮上人	四判洋布裝 五〇頁	定價二・二 送料一・〇〇
常盤大定	増補訂正 佛陀の聖訓	菊半截函入 八三頁	定價一・八 送料一・〇〇
本多日生	法華經講義	菊判洋布裝函入 一〇〇頁	定價各三・四 送料各二・四〇
本多日生	日蓮聖人正傳	四判洋布裝函入 五〇頁	定價二・二 送料一・〇〇
本多日生	日蓮戰士の伴侶	四判洋布裝函入 三〇頁	定價二・二 送料一・〇〇
菰田萬一郎	最近倫理思潮	四判洋布裝函入 三〇頁	定價一・八 送料一・〇〇
菰田萬一郎	倫理學	菊判洋布裝 七二頁	定價三・二 送料一・八〇
久保良英	参考心 理學	菊判洋布裝 五四頁	定價二・四 送料一・八〇

帆足理一郎	三訂増補 聖き愛の世界へ	四判洋布裝函入 六七頁	定價二・四 送料一・〇〇
帆足理一郎	改訂 人間苦と人生の價值	四判洋布裝函入 四三頁	定價二・四 送料一・〇〇
帆足理一郎	戀 愛 論	四判洋布裝函入 三六頁	定價二・四 送料一・〇〇
帆足理一郎	社會文化と人間改造	四判洋布裝函入 四五頁	定價二・四 送料一・〇〇
帆足理一郎	宗教哲學概論	菊判洋布裝函入 八五頁	定價五・八 送料二・四〇
帆足理一郎	婦人解放と家庭の聖化	四判洋布裝函入 四五頁	定價二・四 送料一・〇〇
姉崎正治	新時代の宗教	四判洋布裝函入 四二頁	定價二・〇 送料一・〇〇
姉崎正治	宗教と教育	四判洋布裝 六二頁	定價一・六 送料一・二〇
姉崎正治	根本佛教	菊判洋布裝 四七頁	定價二・四 送料一・八〇
姉崎正治	意志と現識としての世界へ	菊判洋布裝 各七五頁	定價各三・四 送料各二・四〇

E. Taro

宮澤英心	家庭苦に悶える者に	五六判布裝函入	送料價	一・八二〇
根岸橋三郎	幕末開國新觀	五六判布裝函入	送料價	三・〇四〇
中江兆民	縮正一年有半	三六判洋裝	送料價	一・四八〇
赤野松智空	宗教史概論	菊判洋布裝函入	送料價	三・〇八〇
赤野松智空	現代哲學に於ける科學と宗教	菊判洋布裝	送料價	二・八八〇
歸崎一正	社會道德上の共同責任	菊判〇並頁裝	送料價	〇・九六〇
歸崎一正	社會問題と教育問題	菊判〇並頁裝	送料價	〇・九六〇
歸崎一正	少年裁判と監視制度	菊判〇並頁裝	送料價	〇・二八〇
東京市電氣局	勞働關係法令集	四六判洋布裝	送料價	一・二八〇
藤原銀次郎	勞働問題歸趣	菊判洋布裝函入	送料價	二・一八〇

高里良恭	人類進歩の史的考察	四六判布裝函入	送料價	一・八二〇
安東俊明	公民讀本	四六判洋裝	送料價	一・四〇〇
帆足理一郎	婦人問題評論集	四六判洋裝函入	送料價	二・四〇〇
大日本靈智學研究会編	靈智學初步全三冊	袖珍判洋裝	送料價各	〇・三〇四
宇高兵作	靈智學解說	菊判洋布裝函入	送料價	一・五八〇
畔柳芥舟	世界に求むる詩觀	四六判洋裝函入	送料價	二・〇〇〇
姊崎正治	世界文明の新紀元	四六判洋裝函入	送料價	二・二〇〇
田中王堂	象徴主義の文化へ	四六判洋裝函入	送料價	二・二〇〇
小西重直	學校教育	菊判洋布裝	送料價	二・二八〇
ミヤカワ・ヤスジ	米國權力論	英文菊判洋布裝	送料價	三・一八〇

George Yipping 1547 種

書叢館文博

——刊新——

芭蕉句選年考	今昔物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	冠萬葉辭集略考解	萬葉集略解	萬葉集略解	萬葉集略解
全	上卷	下卷	中卷	上卷	第四册	第三册	第二册	第一册
送正料價	送正料價	送正料價	送正料價	送正料價	送正料價	送正料價	送正料價	送正料價
一八二〇	一三〇〇	一三〇〇	一三〇〇	一三〇〇	一六二〇	一三〇〇	一三〇〇	一三〇〇

~~568~~ 902
~~340~~ H36

終